

雌の貌

首から下は、女だった



二十二歳の春、彼が自身の身体の裏側にある未知の扉を開けたのは、純粋な好奇心のせいだった。それまで性欲の処理はありふれた方法で済ませていた彼だが、ふとした弾みで目にしたアナルプレイの記述が脳裏に焼き付いたのである。彼は衝動的に浣腸キットとローション、そしてデイルドをネットで購入した。到着した日の夜、彼は入念に腸内を洗浄し、冷たいローションを指に絡めた。初めて触れる後孔は驚くほど抵抗があったが、ゆっくりと指を沈めていくと内側の壁が痙攣するように吸い付いてくる。異物感と微かな痛みが混じり合う中、デイルドの先端を当てがい、体重をかける。括約筋が悲鳴を上げるように押し広げられ、太い異物が腸の奥へと滑り込んでいく。荒い息を吐きながら、彼は騎乗位の要領で腰を上下に振った。硬質なデイルドが内壁を何度も擦り上げるたびに、背骨を駆け上がるような鋭い快感が脳髓を痺れさせたのである。それからというもの、彼はすっかりその快楽に溺れることとなった。

ちなみに彼には、女性風俗嬢の手によってアナルを開発された経験があった。嬢の指が内側を器用に掻き回した時である。

「お尻の穴、すごくきれい！」

嬢は無邪気な声でそう言った。

「女の子みたいな声出てる」

嬢の言葉通り、彼の口から漏れていたのは低い男の唸り声ではなく、甘く切羽詰まったような喘ぎだったのだ。その時の感覚が、彼の心の奥底に深く根を下ろしたのである。

妄想は日を追うごとに肥大化していった。自分はメスになりたいのだ。そう自覚した彼は、まず女装を試みることにした。彼の身長は百七十九センチと高く、見た目は長身の男性にしか見えない。しかし体重は五十七キロと細身で、肋骨のラインから腰骨にかけてはつきりとくびれがあり、そのスタイルにはかねてより自信を持っていた。彼は剃刀で脇毛や足の毛を念入りに剃り落とした。肌に当たる空気が圧倒的に増える。滑らかになった肌の感触に陶醉しながら、彼はネットで注文した黒のキャミソールワンピースと女性用の紐パンティを身に着けた。鏡に映る首から下の姿は、紛う方なき女のそれだった。ただし女装での外出など到底無理だと彼は思っていた。対面する人間の目はごまかせない。あくまで首下女装に徹し、自宅の密室でアナロオナニーにふける時だけ、その姿に変身するのだった。

（体験版はここまで）